

未来を創りだす子どもを育てる楽しい学校づくり ～未来の街づくりに参加する学びによる地域を愛する心の育成～

新潟市立五十嵐小学校
校長 諸橋 智

1 はじめに

平成29年度に改定された学習指導要領では、「資質・能力の3つの柱」により各教科等の目標や内容が再整理されるとともに、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改革、学校の「カリキュラム・マネジメント」という考え方が示された。改定を受け当校では、令和元年度に「五十嵐の教育を語る会」を開催し、地域と共に五十嵐地域の子どもに育てたい資質・能力として、「しなやかな心」を基盤として「考える力」「つながる力」「表す力」の3つの力を関連付けて育てることが検討・共有された。さらに令和2年度には教育目標を改め「未来を創りだす子ども」とした。

これらの実現を図るため、令和3年度より新たな3つのプロジェクトを立ち上げた。併せてコミュニティー・スクール（以下：CS）のモデル校指定を受け、社会に開かれた教育課程の実現を目指してきた。総合的な学習の時間を柱としたカリキュラム・マネジメントの推進と、その学びを生かした全校縦割り遠足の取組により地域に働きかける学びを実現し、地域を愛する心を育成することを目指した。

2 課題解決の取組

(1) 3つのプロジェクトによる教育活動の推進

従来、当校では、五十嵐浜での活動や新潟大学との連携の取組が根付いていた。3つの資質・能力を育てるにあたり、より一層地域の人・もの・ことにかかわり、地域と一体化した学びを創出し、地域への愛着と地域の発展を願う心を育むため、令和3年度から新たなプロジェクトでの取組を始めた。

① 「考える力」を育む「学びプロジェクト」

総合的な学習の時間と生活科を軸にESDを推進する「五十嵐カリキュラム」の刷新に向け全職員で取り組んだ。刷新に当たり、各学年の暦年の年間計画と6年を通した歴年の年次計画のマトリックスで俯瞰し、他の単元・教科と関連が図れるようにした。具体的には、五十嵐地域の成り立ちを追究する3学年、眼前の

海から環境課題に目を向ける4学年、砂浜と松林をテーマに人々の暮らしを考える5学年、防災の視点から五十嵐地域の発展に向け発信する6学年、と構成している。 ※資料1

また、五十嵐浜「清心の森」の松の植樹に地域と共に取り組んだ。令和3年度に初めて行った取組であるが、令和4年度からは5学年の総合的な学習の時間に位置付け、活動を発展させている。さらに海岸清掃への取組は、「日本海夕陽ラインプロジェクト」として、近隣校（真砂小、五十嵐中、青山小）とのコラボへと発展し、地域の学びとしての新たな一歩を踏み出した。いずれも発展する街づくりに参加する、未来へ向かう活動とした。

② 「つながる力」を育む「かかわりプロジェクト」

縦割り「なかよし班活動」では、「しなやかな心」で支え合う人間関係を育んでいる。子どもたちが自ら考え、決定し、思い切り活動する場を重視し、めあてと振り返りを明確にする中で積極的に人間関係を構築している。運動会や六送会などの各種行事、毎月の縦割り遊びの日などの日常的関わり、「イカちゃんのきまり」

（校則）作りなどの場面は、子どもが自己決定することを保障する大切な活動である。それぞれの活動には、SEL（社会性と情動の学習）の授業を組み合わせ、単元として構成し教育課程に位置付けた。令和4年度には、新たに総合的な学習の時間の学びを生かした街づくり参加の一環として、全校縦割り遠足（以下：なかよし遠足）を実施し、「つながる力」を育む中心行事として活動を展開した。 ※資料2

③ 「表す力」を育む「思いやりプロジェクト」

全教育活動を支えるのは、五十嵐UDLである。子どもの表現方法や参加方法、そして教師の働き掛けのユニバーサル化を中心に提案・実践を続けている。また、年3回のアセスの実施により子どもの心の声を聴き、一人一人の安心・安全につながるよう「おしゃべりタイム」（教育相談）を年2回行っている。自分にも他の人にも、思いやりを形に「表す力」が、互いを尊

重する心につながっている。

(2) 社会に開かれた教育課程の実現に向けて

令和3年度にCSのモデル校指定を受けた。令和3年度は、教育ビジョンの承認などの他に、学校の実態を理解してもらうためCS委員による学習参観、指導案検討会や協議会への参加を行った。令和4年度は、創立50周年を迎える。これを好機ととらえ、学校と地域が一体となった学校づくりに向け、学校運営協議会を土台に据えた教育ビジョンを作成した。※資料3

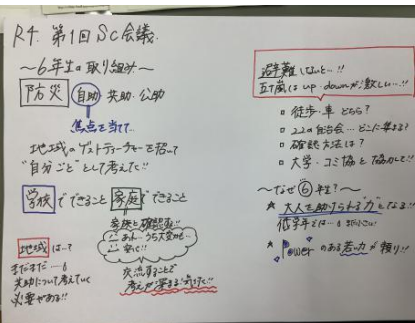
5月に行われた学校運営協議会では、50周年を機に60周年に向けての改革としてカリマネの第一歩となる、職員とCS委員との情報交換を行った。それを経て新たに構成した学年の生活科・総合的な学習の時間の重点は下の表の通りである。

学年	重点
1年	50周年おめでとう！学校大好き1年生
2年	町のすてきをつたえよう
3年	五十嵐探検隊
4年	ふるさと 五十嵐 SDGs
5年	あつまれ！清心の森
6年	IKARASHI BOSAI フェス2022

地域をよく知るCS委員から人・もの・ことに関する有益な情報を得ることで、その後の子どもたちの学びづくりにつながった。



CS委員からは、「地域を題材に学習をしてもらえることは、誇らしい」「できることは何でも協力したい」と



さらに共働に向かう言葉をいただいた。

...(3) 全校縦割り遠足に向けた取組

子どもたちが自ら考え、決定し、思い切り活動する街づくり参加の中心行事として、なかよし遠足の検討を令和3年度から全教職員で進めてきた。

当校が実施したなかよし遠足の主な特徴は、

- ・活動範囲は校区内とし、大人は原則引率しない。
- ・コース、日程、活動内容は班ごとに決める。
- ・班の全員が何かしらの役割（以下：係）をもつ。などであり、時間枠（9時～14時30分）以外は班で相談して決めるものである。

なかよし遠足を実施するにあたり、職員から不安の声も上がった。ただ、このような経験をすることが、子どもたちの生きる力、豊かな人間性を育むことにつながることを、全職員で繰り返しワーキングを行うことで実施にたどり着いた。これに至るまでの手立てには、次の通りである。

① 職員による遠足ワーキング①

当校では、隔週で木曜日の16時から30分間を「ショート研修」として位置付けている。その中でワーキングを重ね、なかよし遠足計画を作り上げた。

ワーキングでは全職員で

- ・なかよし遠足で児童につけたい力
- ・こういった手立てを設けたらその力がつくか

を考えた。職員から出た意見は以下のとおりである。

つ け た い 力	<ul style="list-style-type: none"> ◎自分でできることを考え、行動に移す ◎気持ちの折り合いをつけられる ◎多様な考えの人とのかかわりを通して、自身の考えや行動をアップデートできる ・互いを思いやった行動ができる ・同じ目標に向かって協力する ・異学年と進んでかかわる ・周りの状況を見て行動できる ・企画する ・やり遂げる ・自主性、自発性をもったリーダーシップとフォロアシップ
手 立 て	<ul style="list-style-type: none"> ◎個に責任を与える ◎班で協力するミッションを与える ◎地域を自分たちで学ぶ ◎大人はついていけない ◎子どもたち自身で決める機会を取り入れる ・(ある程度の) 体力的、思想的負荷を与える ・ゴールは自分たちで決める

※◎は重視するとしたこと

②職員による遠足ワーキング②

1回目のワーキングでは、児童の姿でのゴールイメージの共有を図った。2回目は、より具体的に、遠足の目的地と子どものできそうな係について考えるワーキングを行った。

～各学年でできそうな係（案）～

1年生	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のことは自分です。 ・進んで参加する
2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ係 ・ごみ拾い係
3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・保健係 ・情報提供係
4年生	<ul style="list-style-type: none"> ・時計係、地図係・出発前の呼びかけ係
5年生	<ul style="list-style-type: none"> ・6年生のサポート ・中学年や2年生のサポート
6年生	<ul style="list-style-type: none"> ・プラスの言葉がけをする ・みんなが楽しめる話題作り
たんぽぽ 学級	<ul style="list-style-type: none"> ・個の実態に合わせた目標をクリアーする

職員は思いを広げ、一人一人が積極的に意見を出し合い、交流する様子が見られた。その後も複数回のワーキングを通して、地域に根差した総合的な学習の時間の体験を生かした遠足の具体を作り上げることができた。この後、かわりプロジェクト部で要所を考えて整理し、子どもへの指導プランが作られた。

② 事前指導

夏休み明け、子どもたちに遠足の実施と方法を話すと、子どもたちからは大歓声が上がった。縦割り班ごとに目的地や活動内容を決める話し合いを行い、学年の違いをこえて、時間を忘れて夢中になって取り組んだ。その姿はまさに「しなやかな心」で「考える力」「つながる力」「表す力」が発揮される場面となった。



50 なかよし遠足 予定表	
名前	2022年10月25日(火)
9:00~9:30	学校出発
9:30~10:00	マラソン
10:00~10:30	遊園
10:30~11:00	遊園
11:00~11:30	お茶/お菓子
11:30~12:00	お茶/お菓子/おしゃべり
12:00~12:30	おしゃべり/お菓子
12:30~13:00	遊園
13:00~13:30	遊園
13:30~14:00	お茶/お菓子/おしゃべり
14:00~14:30	学校到着

この予定表は家に持ち帰って、おうちの大人にも見せましょう。

一方職員も子どもたちが安全で楽しく遠足を行えるよう、地域に向け準備を進めた。「子どもたちの活動場所の確認」「トイレの依頼」「地域への周知」など、アイデアが次々を生まれた。特に今回は子どもたちだ

けでの活動になることから、安全面の確保は最重要課題であった。職員ワーキングを重ねながらCSに情報提供と相談をしていたところ「こういった時こそ我々の出番です。」と、全面的に協力をいただけることとなり、なかよし遠足はCS共催となった。そして、コミュニティ協議会理事会の会合にて遠足の説明をしたり、遠足のチラシを作成し地域回覧したりと、地域と共につくる活動に発展させることができた。

※資料4

④遠足当日

なかよし遠足は、子どもたちにとって「大冒険」となった。遠足では一人一人が自分の役割と責任をもち活動に取り組んだ。高学年が低学年の手を引いたり、荷物を持ったりする姿はもちろん、中には中学年に激励される高学年の姿など、あちらこちらで微笑ましい姿が見られた。



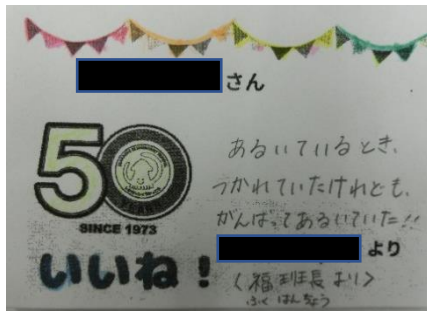
CS共催となったことで、遠足当日は100名を超える見守りボランティアが集まった。また、ボランティア以外にも多くの地域の方々が、子どもたちの活動の様子を見守ったり、子どもたちに声を掛けたりと、地域にたくさんの笑顔があふれる一日となった。

ある班は12.5kmもの距離を歩き通した。どの班も子どもたちの表情は、この上なく晴れやかであった。

⑤なかよし遠足後の児童、参加したボランティアの声

なかよし遠足後には、児童一人一人が「いいねカード」を書き、互いの行動を称え合った。良い姿や頑張りを班の友達からカードでもらうことにより、自分自身の行動を客観的に振り返り、自己肯定感を高めることにつながった。

子どもたちの振り返りやボランティアの声から、全校縦割り遠足は子どもたちの成長の場としてはもちろん、学校と地域とを結びつける機会になった



【児童の振り返り】

- ・1年生がどこへ行くかわからないときに教えてあげました。
- ・楽しくできたし、5年生の役目を果たすことができたと思う。何より下学年を楽しんできたからよかった。
- ・班のみんなをよく見て遅れている子がいたら、その子について、その子のペースと一緒に歩いた。班のみんなで協力して、楽しい遠足になりました。

【参加したボランティアの声】

- ・縦割り遠足で児童が主になっていることがとてもよかったと思いました。
- ・このような学年をこえた遠足は、とても大きな成長の場になると思います。来年以降もぜひ続けてほしいと思います。
- ・色々なところを歩いて学区内を知ることは、自分たちが住む地域への、愛着をもつきっかけになると思います。

次年度は、なかよし遠足の中にPTAや地域の各団体などの主体性を発揮させ、イベントやミッションを組み入れることで、一層協働した取組ができるようにしたいという声が、職員からも地域からも上がっている。

3 取組の成果と課題

(1) 学校評価アンケートの結果から
～児童アンケート～ ※数値は肯定的評価の割合 (%)

質問項目	R3	R4
学校は楽しい	90	92
相手の気持ちを考え、助け合っている	89	92
友達や学級・学校のために自ら行動している	87	90
友達にぼかぼか言葉を言っている	84	91

この他にも、全16項目のアンケートのうち、14の項目で昨年度の数値を上回ったことは、これまでの3プロジェクトによる取組の成果であると考えられる。

(2) 成果

- ・3つのプロジェクトによる教育活動の推進により各プロジェクト主任を中心としながら、職員が協働し、主体的に教育活動を展開するようになった。
- ・隔週のショート研修や主任会などにより、職員間で、したいことが共有できている。
- ・学校運営協議会との共同的第一歩が、地域と学校が支え合い、ともに成長し、活性化していく基盤となってきた。
- ・学校と地域が、育む資質・能力を共有したことにより、ボランティアとして関わる方々などは、見通しをもって活動に入ることができている。
- ・子どもたちが自ら考え、決定し、思い切り活動する場の中心行事として創り上げた遠足は、子どもと職員に意識の変革をもたらした。さらに、CS共催としたことにより、地域全体を共働したダイナミックな活動となったことは、創立50周年にふさわしい新たなスタートにつながった。

(3) 課題

- ・今後は3プロジェクトの取組をPDCAサイクルに則り評価を行うことで、より教育効果を高めていくようブラッシュアップする。
- ・全職員で情報共有を行い、協働的な取組ができているものの、各プロジェクト主任にかかる負担は大きい。主任の負担軽減のために組織の分業を推進する。
- ・今まで以上に地域の課題を地域住民と共に考えたり、自分たちの学びを地域にアウトプットしたりすることで学校の取組を地域と共につくり出す。

4 おわりに

未来を創りだす子どもを育てる楽しい学校づくりは、まだ始まったばかりである。生活科や総合的な学習の時間を中心にカリキュラム・マネジメントを行うことで、教育活動の効果は何倍にも膨れ上がる。そしてそれは、子どもはもちろん、我々教職員にとっても楽しくやがいのあるものになっていく。子どもも教職員も地域の方々も「五十嵐小学校は楽しい学校」「五十嵐小学校大好き」と思えるような教育課程作りにこれからもチャレンジしていきたい。12月に行われる創立50周年記念パネルディスカッションでは、区長を交えて10年後の五十嵐小学校の教育が熱く語り合われるであろう。